

〈モノといのち〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

写真の奇妙な形の物体は何だろう。折り紙、オモチャ？いやいや、これは、オランダの鬼才アーティスト、テオ・ヤンセンの巨大なオブジェ、ストランド・ビーストの一作である。風が吹くと乾いたリズムカルな音をたてながら、悠然と歩き始める。その様子は、さしずめ宮崎駿監督のアニメ「ハウルの城」の歩く家、あるいは「風の谷のナウシカ」の巨大な走る甲虫「王蟲（オーム）」を思い出させる。

風を受けてカシヤリカシヤリと六本（八本？）の足を次々に繰り出して歩いてゆく姿は、まるで生きもののようでもありユーモラスでもある。自ら動くアトーこれだけでも驚きだが、この映画はさらに新鮮な発見と楽しさに満ちている。わずか五分の上映時間中に、目からうるこが何枚落ちることだろう！

そもそも本作の製作目的は、この歩くオブジェのミニチュアを雑誌「大人の科

学マガジン」（学研）の付録にするという大胆な企画の下にその創作と過程を追う、というもの。付録といっても本当に「歩く」精巧なミニチュアである。ヤンセン作品の原理に沿いながら、独創的な想像力を駆使して開発した風力による歩行ロボットだ。

精巧なミニチュアを生み出すのは「試作屋」と呼ばれる永岡昌光さん。一ミリの二〇本の線を引くという「モノづくりの匠」である。これまでに同誌五〇冊以上（別冊含む）の付録のうち三〇点以上を手掛けた専門職人である。

永岡さんの作品の下絵を基に、実際に付録を製品化し、大量生産するのは台湾と中国の工場である。「人件費が安いからではない。技術が優れているからだ」と永岡さんは言う。かつての技術立国日本では若い世代が育つておらず、今や中国や台湾に追い越されている。中国では専門学校でどんどん若い技術者を教育

し、羨ましいほどだと。映画の中でも、永岡さんの〇・〇五ミリの狂いも許さない厳しい要求にこたえて複雑な下絵を平面化し、鋳型で部品を作り、微調整し、組み立て、とチームワークよく作業を進める若い工場技術者らの姿が描かれる。

誰でも組み立てられる付録は、想像以上に皆が手と手でやり取りをしている。便利な機械や道具でボンと簡単にタッチするのはなく、目を凝らし気を集め、心を込めて手で作り上げていく。まるでモノにいのちを吹き込むように。世界一の付録を作るためには、今や台湾・中国はなくてはならないパートナーだ。政治や時事問題を超えたモノづくり職人同士の心意気が伝わってくる。「撮影が進むにつれて偏見がガラガラと崩れていきました」と忠地監督は語っている。

忠地監督は、一九七六年生まれ、女子美術大卒。二〇一〇年から一年間映画美術学校で学ぶ。修了製作のヤンセン作品のドキュメンタリーを原型に本作を製作。子どもから大人まで魅了する科学の楽しさを的確に描き出す力量は素晴らしい。今後が楽しみな大型新人女性監督。上映の問い合わせは、ウツキー・プロダクション（〇三―五二二三―四九三三）まで。

『おとなのかかく』

ドキュメンタリー映画 (50分)

監督：忠地裕子

出演：工房匠（たくみ）：永岡昌光、大人の科学マガジン編

集長：西村俊之、テオ・ヤンセン ほか

公開中

©2013 Studio Q-Li

